

数字好きの統計ぎらいの日本人

日本人は、何でも何か統計で示されないと納得しないし、また逆に、統計とおぼしき数字が並んでいると鵜呑みにしてしまうといわれている。しかも、これには、世界中で同じ様な性癖のあるのは、アメリカ人であって、この性質は、戦後の占領軍の教育改革のなかで植えつけられたものなどといったもっともらしい説明までもついている。もっとも、この事実を証明する様な両国の国民性を比較した統計調査もない様である。確かに、戦後の数学教育のなかには、確率・統計といった項目がとり入れられたりしているけれども、果して、その結果なのかというのは疑わしい。むしろ、第二次世界大戦中になされた、様々な調査のことを考えると、戦後の現象であるといえるかどうか疑わしい。1929年のアメリカのウォール街の株の暴落に端を發した大恐慌の後の長期不況の乗り切りに示したアメリカと日本の知識人失業対策の違いの話を引きと、ますますその様に思われる。日本は、知識人失業対策に様々な統計調査を実施したけれども、アメリカの方は、議会図書館での図書整理のカード記述の標準化と、その結果としての納本図書について、標準図書整理カードの印刷発行という事業の方を選び、その結果アメリカの図書館の全国総合目録印刷刊行となり、図書館の知的資源の全国一元化が行われたという風にかけている。前者の日本の統計調査の方は、実際に調査報告書等で確認しているけれども、後者の方は、何の本で読んだのであったか、今は記憶も定かではない。ただ、このエピソードで示される事は、両国の国民性の差を奇妙に的確に説明している様である。

日本人の数字好きは、活字好きと裏表であって、活字好きは、出版物の多さにも示されていて、毎

日多くの新刊書が出版されて店頭に並び、最近では、その出版情報が、書店の端末で、オン・ラインで入手出来る様になってきている。けれども、その出版物が、どこ迄読まれているのか、出版され取次店を通じて小売店に配本になり、荷解きもされずに返本される書物のいかに数多いことか。しかも、その様に返本された本は、在庫課税を恐れる出版社によって、どんどんと断裁されて廃棄処分になるといわれている。正確な統計で示されていないけれども、そのために無駄にされる紙資源、延いては、緑の木は、日本の木々だけではなく、様々な国の森を裸にしているという。そのうえ、日本の国内の知的資源の無駄使い——じっくりと考えを温めて、あるいは調査を行って、原稿を手直しをして一冊の書物にまとめあげるというのではなく、A社で作った本が売れそうだとあれば、類似の企画をB社が出し、C社が出し、ということになる。百科事典の編集といった国家的な事業でさえそうである。知的営みというのも、すべて短期的採算と、長期的見通しのなさ、あるいは、長期的計画性のなさという方式で行われるというので良いのであろうか。

最近では、様々なところで民活という言葉がきかれる。これは、民間活力の利用ということの略なのだそうである。民には、官にはない、採算意識と計画立案に当たっての思考の柔軟性があり、しかも、何か決意するときには迅速になされるという利点があり、日本の昔からの官尊民卑という伝統は棄て去るべきであるというのが、その主張の根柢の様である。しかし、果して、本当に何から何まで、この様な原理で、民間の事業にして良いものであろうか。発想の柔軟性であるとか、手続の簡素化といった事では、民間の仕事の方法に見な

一橋大学経済研究所
日本経済統計文献センター

教授 松田芳郎

らうべき点が多々あるのは否定しがたい。また事業主体が、民間の資金を利用し……という表現も確かにもっともらしくきこえて来る。けれども、採算を考慮し……という辺りになると果して、そうなのかという疑いが出て来る。日本が、お手本にしているといわれていたアメリカ合衆国に於ても、先に引いた議会図書館の印刷カード目録システムに示される様に、何が公的な事業としてなされるべきなのか、というのは十分検討されている。そして、そこでは、確かに合理的な計画というのは追及されるけれども、すべてを採算がとれるものですべきだなどとは考えていない。まさに、公的なものとして、何を国民的な視野で世代を超えて長期的視点から実施すべきであるかということが検討されたうえで、実施されている。ただ、その長期的視点というのは、一度決めたことには固執するということではなく、続いているから良いのではないといって、計画の見直しは図るという柔軟性を備えている点では、大艦巨砲時代の終りを自分の手で証明しておきながら、大和・武蔵という巨大戦艦の完成とその温存に固執した日本の発

想とは異っている。

統計調査は、短期的な視点からは目に見える採算のとれるような利益などというのは何もない。しかも、この頃の様なパソコンの普及と、様々な調査会社の調査代行は、政府部門での統計の実施に固執する必要はない。ただ、日本人の性癖として、数字は好きであるから、何かもっともらしい調査結果が欲しい。そのためには、統計調査結果は民間から金で買くと良い。それぞれ民活である、という主張すら散見する様になってきた。具体的には、調査が特定の年に集中するのを防ぐために、周期調整をするという名目での周期の長さを延すといった形の節約やら、調査の廃止・調査項目の削除である。それぞれもっともらしい名目がついている場合が多い。しかし、本当にそうなのか、統計調査自体の見直しを含めて、長期的な視点から検討されるべきではないだろうか。例えば、昭和60年10月25日の統計審議会の答申「統計行政の中・長期構想について」が、どれだけ有効に生かされているのか。その内容自体が、もっと広範囲に検討されてもよいのではなかろうか。

昭和62年春の叙勲・褒章

統計調査員さん12名が受章の栄

統計功労者に対し4月29日「春の叙勲・褒章」の発令があり、本県においても下記の統計調査員さんが受章の栄に輝いた。

勲五等瑞宝章

小曾納盛夫氏(79歳) 内原町統計調査員

勲六等単光旭日章

大越欽治氏(83歳) 笠間市統計調査員

勲六等瑞宝章

中田正雄氏(86歳) 笠間市統計調査員

藍綬褒章

小田倉金藏氏(84歳) 大宮町統計調査員

濱野喜一郎氏(83歳) 下館市統計調査員

山崎直氏(82歳) 瓜連町統計調査員

飯島利男氏(81歳) 大洋村統計調査員

高野彌四郎氏(81歳) 八千代町統計調査員

荻沼重慶氏(80歳) 銚田町統計調査員

中村敏夫氏(80歳) 大野村統計調査員

根崎正義氏(79歳) 小川町統計調査員

増田政雄氏(79歳) 八郷町統計調査員